

# 『うつほ物語』における「たぐひなし」

——俗世の賛美

泉屋 咲月

## はじめに

『うつほ物語』における「たぐひなし」という表現について考えた。 「たぐひなし」とは、「比べられるものがないほどであるさま」や「匹敵するものがないさま」を表し<sup>①</sup>、他と比較した上でその希少性を示し、時には物事の程度がはなはだしいことも表す。負の感情や状況が著しいさまを示す場合もあるが、対象を至上のものとして賛美する際に用いられることが多い。

希少性を表す語は「たぐひなし」のほかにもあるが、「たぐひなし」は、特定の人物に対して、あるいは特定の状況において、特徴的に用いられる場合がある。たとえば、『源氏物語』においては、光源氏の用いる「たぐひなし」という表現には、〈紫のゆかり〉の問題とかかわった特徴が看取できる<sup>②</sup>。

『うつほ物語』の「たぐひなし」に関しては、湯原美陽子によつて、「普通の人を超えることを表す語」として、「この世のものならず」などの表現とともに仲忠や俊蔭の娘の容姿美を表す際

に多く用いられることが指摘されている<sup>③</sup>。このように容姿美を描く表現の一つとしての「たぐひなし」については先行論があるが、「たぐひなし」という表現独自の『うつほ物語』における特徴についてはまだ検討の余地がある。

『うつほ物語』において、「たぐひなし」という表現は全十八例認められる<sup>④</sup>。本稿では、これら十八例の用例をたどりながら、『うつほ物語』において「たぐひなし」がどのような特徴をもつて用いられているのかを明らかにしたい。

## 一 賛美表現以外の用法

『うつほ物語』における「たぐひなし」十八例のうち、賛美表現としての用法は十四例、それ以外の用法は四例であり、やはり賛美表現としての用例が多い。本節では、賛美表現以外の用法について見ていきたい。まず、物事の程度のはなはだしさを表す用法三例を見たい。

恨むれど嘆く数にも居ぬ塵や深きあたごの峰となるらむ

とて、兵衛の君に、「これ参らせ給ひて、御返り賜はりて、賜へ。たくひなくうれしかりしを、今またなしてなむ。なほ、御心とどめて思ほせ」。

(藤原の君 一〇〇〇)

実忠は、兵衛の君にあて宮への返歌を託す際、以前自分が贈った歌に対してあて宮から返歌があった折の喜びの程度を、「たくひなし」と表現している。次の用例も程度のはなはだしさを示すものである。

仲頼は、天下の一院三宮婿取り給へど、取られず、白銀・黄金、綾・錦をも物とも思へらず、あやしくたくひなき好き者にて、「天女下り給へらむ世にや、わが妻の出で来む。天の下には、わが妻にすべき人なし」となむ思へりける。

(嵯峨の院 一九〇)

仲頼を婿にと望む人は多いが、仲頼は最高の地位の人々が婿に望んでも承知せず、財宝を差し出されてもなんとも思わない、この上ない物好きであると語られる。ここでもまた、「好き者」の程度がはなはだしきことを示す表現として「たくひなし」が用いられている。次の例も見ておきたい。

殿の上達部三所、大将・中納言殿と物語し給ふほどに、故侍従の御弟、大夫なりしは、内蔵頭にて、藏人にぞものし給ふ、故侍従には、かたちも心もまさりたる、たくひなき色好みにぞありける、かはらけ取りて出で給へり。

(蔵開・下 五八一―五八二)

涼の家の産養の夜、涼、仲忠、正頼の息子たちが語らうところへ、近澄がやってくる。近澄が仲澄にまさっていること、この上ない色好みであることが語られる。ここでも、「色好み」の程度

がはなはだしきことを表現するために「たくひなし」が用いられている。

以上に見てきた三例は、物事の程度がはなはだしきことを表す用法であるが、こうした用法のほかに感情や状況が非常に悪いという意味で用いられる例もある。『うつほ物語』においては、次に挙げる用例がそれに該当する。

「……昔をだに、たくひなき身」と思ひ給へしに、またかかるとも侍りけり」と、泣く泣く言へば、……

(俊蔭 五一)

北山まで俊蔭の娘と仲忠を迎えに来た兼雅は、山を下りるよう俊蔭の娘を説得する。兼雅の説得に対し、俊蔭の娘は、兼雅と出会った「昔」を「たくひなき身」(不幸な境遇) だったとして、また現在も「昔」以上に不幸な状況であると語る。この用例における「たくひなし」は、賛美表現としてではなく、著しく不幸な境遇を語る表現として用いられている。

## 二 賛美表現としての用法

ここまで、賛美表現以外の用法四例を見てきたが、賛美表現としての用法にはどのようなものがあるだろうか。『うつほ物語』において賛美表現として用いられている十四例について、誰から誰(あるいは何)に対して用いられているのかに着目し、表にまとめた(表)。

賛美表現としての用例のうち、人物全体やその人物の能力や性質(以下「人物」と表記)を対象としているものは十二例、(人

物)以外を対象としているものは二例ある。まずは、(人物)以外を対象としている二例(用例⑤⑫)を見たい。

⑤名をば忠こそといふ。その子を、また思ふ人なく、なく限りなき御仲にて、これもかれも、かたみに、心ざし深くのたまひ契りて経給ふほどに、忠こそ、生ひ出で来るまに、かたち清らなること限りなし、三つになるに、心の聡

		用例	巻
①	兼雅 ↓ 俊蔭の娘	俊蔭	
②	語り手 ↓ 仲忠	俊蔭	
③	語り手 ↓ 仲忠	俊蔭	
④	語り手 ↓ 仲忠	俊蔭	
⑤	語り手 ↓ 橘千蔭と北の方の間柄	忠こそ	
⑥	語り手 ↓ 仲忠・涼	菊の宴	
⑦	帝 ↓ 俊蔭の娘	内侍のかみ	
⑧	人々 ↓ 仲忠	沖つ白波	
⑨	語り手 ↓ 藤栄	蔵開・中	
⑩	正頼 ↓ 仲忠	蔵開・中	
⑪	実忠 ↓ あて宮	国譲・上	
⑫	語り手 ↓ 仲忠が贈った香	国譲・中	
⑬	実忠 ↓ あて宮	国譲・下	
⑭	御方々 ↓ ?	楼の上・下	

【表】『うつほ物語』における賛美表現「たぐひなし」の用例

※誰から誰(何)に対する用例であるのか、「→」を用いて表した。たとえば、用例①は、兼雅から俊蔭の娘に対して用いられた用例である。

く、らうらうじきこと限りなし、父母、撫で養ひ給ふこと限りなし。(忠こそ 一一一)

橘千蔭のもとに誕生した男児は、「忠こそ」と名づけられ、千蔭はその子を鍾愛した。千蔭と北の方の間柄が、この上なくすばらしいものとして「たぐひなし」とされている。ここでの「たぐひなし」は「限りなき」の程度がはなはだしいことを表す表現として見ることもできるが、広く賛美表現として認定した。

続いて、用例⑫を見てみたい。

⑫……御薫炉召して、山の土所々試みさせ給へば、さらにたぐひなき香す。鶴の香も似る物なし。「白き鶴は」と見給へば、麝香の膺、半らほどばかり入れたり。取う出て、香を試み給へば、いとなつかしく香ばしきものの、例に似ず。

(国譲・中 六九六―六九七)

第三子を出産したあて宮のもとで、贈られた産養の品を見る場面である。正頼は、仲忠から贈られた蓬萊の山の州浜台を褒めた。趣向を凝らした州浜台の山の土の部分には、さまざまな香が用いられている。それを焚いた香がこの上ないものとして「たぐひなし」と賛美されている。山の土以外の部分を焚いた香も、「似る物なし」「例に似ず」といった希少性を示す表現で繰り返し賛美されている。

用例⑫は、直接的には「香」が賛美されているが、この「香」が仲忠の贈った州浜台の一部を焚いたものであることには注意したい。立坊争いの渦中におけるあて宮の第三子出産という、貴族社会の重要な局面に際して、仲忠の贈った品を賛美する表現の一つとして「たぐひなし」が用いられているのである。

〈人物〉以外のものを対象とした賛美表現二例を見てきた。それでは、〈人物〉に対する用例では、誰を対象として用いられているのだろうか。

用例⑭が誰に対して用いられているかは第六節で述べることとし、用例⑭を除いた十一例について、その対象の〈人物〉をあらためて確認してみると、次のようになる。

- ・俊蔭の娘に対するもの…二例（用例①⑦）
- ・仲忠に対するもの…五例（用例②③④⑧⑩）
- ・仲忠と涼に対するもの…一例（用例⑥）
- ・藤栄に対するもの…一例（用例⑨）
- ・あて宮に対するもの…二例（用例⑪⑬）

こうして見てみると、仲忠に対して用いられるものが圧倒的に多いことがわかる。まずは、一例ずつしか用例がないもの（用例⑥⑨）を見る。

⑥ かくて、さうはちの物の調べばかり、物の音ども、同じ声に整へて、遊びす。歌仕うまつりなどするほどに、藤中将・源中将など、声たぐひなし。

（菊の宴 三〇七）

十一月の神楽当日、管弦の遊びをし、神楽歌を歌う中で、仲忠と涼の声がこの上なくすばらしいと語られる。

この場面は、『新全集』にも指摘があり、嵯峨の院巻で描かれる神楽当日の場面との対応が認められる。

仲忠笙の笛、幸正ただの笛、仲頼箏、あるじのおとど大和琴、右大将琵琶、兵部卿の親王箏の琴、同じ声に調べて、いとにかく遊び給ふ。

（嵯峨の院 一八二）

この二つの場面は、いずれも神楽当日の音楽の演奏を描いてい

る。また、すぐあとに才名のりと、仲忠が仲澄を相手にあて宮について語る場面が配置されている点にも対応が見られる。

用例⑥と嵯峨の院巻の描写を比較すると、嵯峨の院巻においては、仲忠を含む六人が楽器とともに列挙されているのに対し、用例⑥においては、仲忠と涼の名だけが挙げられている。涼の登場を経た用例⑥において、あて宮の求婚者の中で、涼とともに仲忠の声が「たぐひなし」と賛美されている。ここでは、源正頼家の婿として、仲忠と涼の二人が焦点化されていると考えられる。

続いて、用例⑨を見る。

⑨ 右大弁、懸官、右近少将・式部少輔・文章博士・東宮の学士、内裏・春宮・院の殿上許されたり。「親の時より、敵あり」と申すによりて、少将はかけさせ給へるなり。身の才、ただ今たぐひなし。

（沖つ白波 四五九）

ここでは、藤栄の「身の才」が「たぐひなし」とされている。この場面は、藤栄が正頼に学才を認められ婿になることが描かれるところである。あて宮の入内決定後にほかの姉妹たちの婿が決められ、その中の一人に藤栄も位置付けられている。

この場面を考えるにあたり、当初婿の候補であった実忠と兼雅が拒んだことにより、その代わりとして藤栄が選ばれたということとを重視したい。そして、次の場面との関連も見過ごせない。

……博士たちに、いささか数まへられず、父・母、筋・族、一度に滅びて、はかりなく便りなき学生、字藤栄、さくな季英、歳三十五、かたちこともなく、才かしこく、心かしこき学生なり。

かかる心にも、思ふ心あり。「いかで」と思ふに、ある衆、

藤栄、かく、はかりなく迫るを見て、「こともなき男なりや。

右の大將殿も、かばかりの婿は、え取り給はじかし。容面・

才はありがたしや」など、これかれうち笑ふを、藤栄、紅の

涙を流して、「恥づかしく、悲し」と思ひて、……

(祭の使 二二六―二二七)

藤栄は、両親と親族を一度に喪つた頼りのない身の上であつた。才学で秀でていることが繰り返し語られるもの、困窮していることから周囲の人間には軽んじられている人物として描かれていた。そして、その嘲笑には、あて宮への懸想や、とうてい正頼家の婿にはなれまいという内容も含まれていたであつた。この祭の使巻の場面をふまえると、用例⑨の描写は、屈辱的な状況に耐えた研鑽の結果の栄達として位置付けられよう。

ここで、「たぐひなし」の対象となつていゝ要素に着目して用例⑨と祭の使巻の場面をあらためて比較したい。

『うつほ物語』の理想的な人物の造型としては、「かたち」「心魂」「才」の三要素が指摘される<sup>⑦</sup>。そうした視点で見ると、祭の使巻では、「かたち」こともなく、才かしく、心かしくと、「かたち」「才」「心」の三要素が賛美されていたのに対し、用例⑨では最終的に「才」のみに限定され、「たぐひなし」とされている。

用例⑥⑨の「たぐひなし」は、「声」や「才」といった限定的な要素を対象に、源正頼家の婿として位置付けられる中で用いられている。

次節以降では、(人物)を対象とする賛美表現としての用法のうち、同じ(人物)に複数回用いられる例について検討していく。

### 三 あて宮に対する「たぐひなし」

まず、あて宮に対する用例(用例⑪⑬)を見てみたい。

⑪「いさや。かの皇女をば、くはしくも見奉らず。思ふ人ののみ。さらにまた世にたぐひあるべうは見えざりし人なり」。

(国譲・上 六四七)

⑬中納言、「いみじきことを申し給ふかな。『いかならむ人』とか思す。女一の宮こそ、『劣り給はず』と聞きしか。それも、向かひ居給へりしかば、氣劣りてこそ。世にたぐひあるべき人にもあらずや」。

(国譲・下 七九四)

用例⑪⑬はともに、実忠が、かつて女一の宮とあて宮を見たときのことを実正に話す場面である。いずれも女一の宮よりもあて宮の方が優れているとして、「たぐひあるべうは見えざりし人」「たぐひあるべき人にもあらずや」と表現される。

用例⑪は、父季明の死に際してあて宮から手紙を受け取り、感激した実忠が、兄である実正と語る場面である。用例⑬は、あて宮腹の第一皇子の立坊決定後、実忠があて宮と文をやり取りしたのち、実正と会話する場面である。

この二つの用例に共通しているのは、実忠が、祭の使巻において正頼邸で侍女に懇願してあて宮の姿を見たときのことを語っている点である。ここで賛美の対象とされているのは、当時垣間見たあて宮の容姿である。いずれも、女一の宮と比較した上で、あて宮の容姿を絶賛している。

あて宮については、かぐや姫との重なりが指摘されており、数

多くの求婚者を登場させることによって、その魅力が描かれてきたことも指摘されている。<sup>10</sup>『竹取物語』を彷彿とさせる、いわゆるあて宮求婚譚が『うつほ物語』の一つの柱となっていることは言うまでもないが、求婚譚の中では垣間見なども描かれるにも関わらず、あて宮の容姿を実忠が「たぐひなし」と賛美することはない。

実忠のあて宮に対する「たぐひなし」が語られるのは、既にあて宮が東宮に入内して皇子たちを産み、いよいよ立坊争いの物語が展開していく中であることに留意したい。季明の四十九日の法要が終わり、その後の人事で、実忠は、正頼の推挙により中納言に昇進する。そして、昇進の挨拶に正頼邸を訪ねた実忠に、あて宮は次のように語る。

上、「御喜びのことは、こたみ、ここにも知り侍らず。』行く先、平らかにも侍り、思ふやうにも侍らは、内裏わたりの御後見は』となむ思ふ給ふるを、…」(国譲・上 六八〇)

第三子を無事に出産し、若宮の立坊がなくなったならば、自分が宮中において実忠の後援者になろうというのである。

加えて、用例⑬の直前での文のやりとりにおけるあて宮の返事は次のようなものであった。

見給ひて、御返り、「見給へつ。宮の御ことは、悪しきやうに言ひ騒ぐなりしかば、いとど、昔の人もし給はぬをなむ、あはれに心細く思ひ給へし。今も、心ゆるびなく恐ろしき世なれば、御宮仕へなどし給ひて、御後見聞こえ給はば、頼もしうなむ。…」(国譲・下 七九二～七九三)

立坊争いに勝利したあて宮は、実忠に東宮の後見をしてもらえ

たら頼もしいというのである。こうして見てみると、国譲上巻から下巻にかけて、立坊争いをめぐる源氏の政治的思惑の中に実忠が据えられていることに気づく。実忠も、娘である袖君の東宮入内のことなどを考えはじめ、あて宮を「たぐひなし」としながらも、かつてのように狂恋に走ることはなく、現実を見据えている。

あて宮に対する「たぐひなし」、すなわち、実忠が用いる「たぐひなし」をたどると、あて宮入内後も一貫してあて宮を思慕し続け、至上の女性としてあて宮を賛美する実忠が見てとれる。しかし、実忠のあて宮を「たぐひなし」とする思いは、家庭の崩壊や社会からの逸脱へ向かう恋情ではなく、あて宮、東宮、ひいては正頼といった源氏を政治的に支えるために機能するものなのである。

#### 四 俊蔭の娘に対する「たぐひなし」

次に、俊蔭の娘に対する用例を見たい。俊蔭の娘に対して用いられる賛美表現としての「たぐひなし」は二例(①⑦)である。

①……秋の朝ばらけに、玉と磨きしつらひたる所に、殊なる飾りもなくやつれ、なかなかなる様なれど、言ふよしなくもてはやされて、清げにたぐひなく見ゆるを、「天女を率て下ろしたる」と驚かれ給ふ。子も、はかなき水干装束なれど、かたちまさりて、いとめでたし。(俊蔭 五二～五三)

兼雅は俊蔭の娘と仲忠を北山から連れ出し、三条堀川に迎える。明け方の光の中、格子を上げて見た俊蔭の娘の「天女」のような美しさが、兼雅の視点から「たぐひなし」とされる。俊蔭の娘の

こうした「たぐひなき」美貌は、次の用例⑦においても賛美されている。

⑦：し出だしたる才など、はた、いとめでたく心憎き人の、そのかたち、はた、世にたぐひなくいみじき人の、さる労ある物の光にほのかに見ゆるは、まして、いとなむ切なりける。

(内侍のかみ 四三八)

琴を素晴らしく演奏した祿として俊蔭の娘は尚侍に就任する。

朱雀帝は、なんとかして俊蔭の娘を見たいと、螢を集めさせる。

そして、その光で見た俊蔭の娘の姿の美しさに驚嘆し、「たぐひなし」と賛美する。この時の俊蔭の娘の美貌は、帝との対面の前に仲忠の視点から、次のように描き出される。

仲忠、これを見るままに、藤壺を思ひ出でて、この北の方を、さらに親と思ひ忘れて、「いづくなりし天女ぞ」と思ひ居たり。

(内侍のかみ 四二〇)

ここで、仲忠に「天女」を思わせた姿こそ、用例⑦でこの上なきものとして帝の目に映った美貌なのである。このように、俊蔭の娘の「たぐひなし」とされる美質とは、繰り返し「天女」のようだとされる人間離れした美貌なのである。しかしその一方で、俊蔭の娘が「たぐひなし」とされる時をあらためて考えてみたい。

まず、兼雅も朱雀帝も、俊蔭の娘を光で照らし、自らの目とらえるということをしている。用例①で俊蔭に「たぐひなし」と賛美されたのは、俊蔭が北山に持参した衣に着替えて山を下り、妻として三条堀川の邸宅に迎えられた時であった。それは、貴族社会から外れたうっほで超世俗的な暮らしをしていた時ではな

く、貴族社会での世俗的な生活の第一歩を踏み始めた、まさにその時であった。また、用例⑦で朱雀帝が「たぐひなし」としたのは、御前で琴を演奏した俊蔭の娘を内侍に任命した時であった。

俊蔭の娘は、くり返し「天女」とされながらも、妻や女官といった、貴族社会における現実的な存在として、夫や帝から姿を見られ、その美貌を「たぐひなし」とされているのである。秘琴を演奏し、奇瑞を起こす者ではなく、俗世を生きる一人の女性として、その美貌を男性から賛美される。このように、俊蔭の娘に対する「たぐひなし」は、都の貴族社会における女性としての、世俗的な賛美を表す言葉なのである。

俊蔭の娘と仲忠のうっほでの暮らしは、都の貴族たちから見ると卑しいものとして見下される要素を孕んでいた。うっほで暮らしていた仲忠の生い立ちは、女一の宮との結婚の際に問題視されていた。仲忠と女一の宮の結婚について、渋る仁寿殿に対し、朱雀帝は、次のように言う。

「うっほを申し出づるにやありけむ。あなさがな。よに、もどきあらむことは聞こえじ。なほ、さ思したれ。こよなき位にしなしてむ。ただ今の見目よりも、かく具したる才に、かたち・心なども過ぐれば、ただ今より、おほえまさりなむ」。

(内侍のかみ 三三八)

仲忠が、北山のうっほで貴族としては到底考えられない生活を送っていたのは事実である。ただし、そこでの異常な成長も、孝心が起こす奇跡も、山奥のうっほで暮らすということも、単なる卑しい生い立ちというより、むしろ物語主人公の特性である。しかしながら、宮廷社会においては、その生い立ちは他の作中人物

たちによる批判の対象にならざるをえない。

そうした卑しいつほ暮らしという欠陥を補って、俗世における地位を確立したのが内侍就任であろう。猪川優子は、俊蔭の娘が尚侍に就任することに関して、仲忠の「へうつほ住み」の負の属性を反転させ、「琴の一族の超越性を盤石なものにした」としており、稿者もそれに賛同したい。

そして、俊蔭の娘が兼雅や帝にとって貴族社会における「たぐひなき」女性であることは、貴族社会を生きる息子の仲忠にも影響していく。三条堀川に迎えられた俊蔭の娘は、兼雅に一途に愛される。仲忠も、兼雅と俊蔭の娘の息子として、学芸を習い、貴族の子弟として人生を歩み始める。俊蔭の娘が兼雅や帝にとつての「たぐひなき」女性であることは、結果的に、仲忠が貴族社会に据えられる契機となっているのである。

## 五 仲忠に対する「たぐひなし」

続いて、仲忠に対する用例五例(②③④⑧⑩)を見たい。『うつほ物語』の主人公仲忠は、誕生した時から、あらゆる美質の持ち主として造型されており、物語全体を通して「たぐひなし」という至上の賛美を最も多く付与される人物である。

仲忠がはじめて「たぐひなし」とされたのは次の場面である。

②北の方、御歳三十に少し足らぬほどなる、御かたちただ今盛りにて、思ほすことなくおはするまゝに、光を放つやうに見え給ふ。子、はた、さらにも言はず、この世の人にも似ず、いとありがたくたぐひなし。琴をばさらにも言はず、異才

も、さるべき師ども召して、笙・横笛も習はせ給ふ。弾き物は、北の方、さる上手におはすれど、琴のなかりしかはこそあれ、箏・和琴などは習はし給ふ。御暇、今は殊におはせねど、殿の出で給へる隙などに、気色ばかりのこの様を聞こえ給へば、いとすぐれて弾き取り給ふ。何ごとも、師に二度問ひ給はず。笛どもも、いとはなやかに、心ありて、日には、書を、二、三巻も読み、琴・笛を五、六帖も吹き弾き取り給へば、「大将は、いづくよりかかる子を尋ね出でて、世の物の上手生ほし立て給ふらむ」と言ひののしる名、高くなり給ひぬ。京に率て出で給ひし三年がほどに、すべて、世にせぬことなくなりぬ。大将殿、ただ、これをかしづき思すよりほかのことなし。

(俊蔭 五三―五四)

三条堀川に迎えられて以降、兼雅から一途な愛情を受ける俊蔭の娘の、まばゆい容姿が描写される。そして、その子である仲忠もその容姿を「たぐひなし」とされている。続く描写では、琴はもちろんのこと、その他の音楽にも通じ、京で暮らし始めてから三年ほどのうちに「すべて、世にせぬことなくなりぬ」とされ、仲忠に対しても兼雅が一心に愛情を注いでいることが語られる。当該場面でも描かれる一連の仲忠賛美において、地の文で仲忠に対して敬語が使用され始める。当該場面は、北山のうつほから都に移った仲忠が、貴族社会において貴族の子弟として人生を歩み始めたことを示しているよう。

仲忠は、その誕生時から、美貌をはじめとしたさまざまな美質を持つ人物として描かれてきた。三条堀川に迎えられるまでの仲忠の美質は、次のような表現で語られていた。うつほに住んでい



たころ、用例②と同様に、母である俊蔭の娘とともに仲忠の美貌が語られる場面である。

かくて、この子、十二になりぬ。かたちの麗しくうつくしげなること、さらにこの世の者に似ず。綾、錦を着て、玉の台にかしづかるる国王の女御・后、天女・天人よりも、かかる草木の根を食物にして、岩木の皮を着物にし、獸を友として、木のうつほを住みかとして生ひ出でたれど、目もあやなる光添ひてなむありける。母も、父君添ひていつきかしづきし時よりも、顔かたちはまさりて、めでたきこと限りなし。

(俊蔭 四二)

ここでは、仲忠が十二歳になったこと、その容貌が美しいこと、母である俊蔭の娘の容姿もますます美しくなってきたことが語られる。仲忠の美貌は、「麗しくうつくしげなる」「この世の者に似ず」「目もあやなる光添ひてなむありける」と表現される。仲忠は誕生時から、「玉」や「光」という美質を持っていた。そしてそれに加えて「大き」いこと、「聡くかしこ」いこと、「変化の者」であることが繰り返して語られてきた。また、こうした美質は、俊蔭一族の特徴であることも指摘されている。

うつほに住んでいたころの場面と用例②を比較すると、「この世の者に似ず」と「この世の人にも似ず」という表現は共通していると言える。大きな相違点は、用例②では俊蔭の娘が「北の方」と呼ばれるところである。うつほに住んでいたころの場面では、「この子…、母も…」とあったところが、用例②では「北の方…、子…」という描写になっている。つまり、三条堀川に迎えられ、俊蔭の娘は兼雅の「北の方」となり、仲忠はその子供として語ら

れるのである。そうした中で用いられたのが「たぐひなし」であった。つまり、「たぐひなし」は、都という世俗から外れたうつほで暮らしていた時ではなく、貴族の息子として都の邸に迎えられてからの美質、いわば俗世の美質を形容する言葉なのである。

こうして見ると、用例②の場面に至るまでの兼雅の視点にも着目される。兼雅が俊蔭の娘と仲忠を発見したのは、琴の音に導かれてのことであった。怖気づく忠雅の制止を振り切り、「天狗のしわざ」であるかもしれない琴の音を求めて、兼雅は一人で「獸」の住む山に分け入って行った。そうして辿り着いたのが、仲忠たちの住むうつほであった。木の前に出てきた仲忠は、兼雅の視点と同化した語り手によって、次のように語られる。

衣、はた、はかなき単衣の姿えたるを着たるに、顔かたちは、ただ光るやうに見ゆ。  
(俊蔭 四五)

琴の音をたよりに獸の住む山を進んで辿り着いた大木から姿を現した少年は、兼雅には「ただ光るやう」に見えた。都の貴族兼雅にとつて、山の中のうつほから出てきた仲忠は、得体の知れない存在であったに違いない。ところが、事情を聞くうちに、眼前の少年が自分の息子であると知っていく。そうして、仲忠が息子であると確信し、「悲しうあはれに」(俊蔭 四七) 思った兼雅は、仲忠に「例の人のやうにてあらむと思す」(俊蔭 四七) と尋ねる。それに対し、出家したいと答えた仲忠を見る兼雅の胸中は次のように語られる。

……あたらしく清らなる、ほど十五、六ばかりと見えて、いみじうめでたきを、よそ人に聞き見むだにあるに、えせきあ

へ給はず。

(俊蔭 四七)

仲忠が自分の息子であると知った兼雅のまなざしがふたたび仲忠を捉えた時、兼雅は仲忠の年齢を推し量る。出合い頭には「ただ光るやう」としかとらえなかつた美貌は、出家を惜しませるものに変わる。兼雅は仲忠を、うつほから出てきた得体の知れない美貌の子供ではなく、慈しむべき自分の息子として捉えなおしていく。

都の貴族である兼雅の、こうした父親としての意識は、俊蔭の娘を下山させようと説得する言葉の中にも見てとれよう。

「さも思さるべきことなれど、この人も、年を数ふるに、十  
二ばかりにこそなるらめ。大きき・掬こそかしこくとも、人の世に経る有様、限りあるものなれば、率て出でて、交じらひなどをこそさせめ。その後見も、誰かせむ。親なき人は、身もいたづらになるものなり。……」  
(俊蔭 五一)

この段階ですでに、息子である仲忠の元服を意識し、貴族社会に投入しようとしていることがわかる。兼雅は、わが子の年齢を数え、その存在を現実の社会に据えていこうとするのである。実際に兼雅が仲忠に学芸を習わせ、その才能がはなはだしいと語られていたことは、用例②として引用した通りである。そうした描写に続いて、仲忠の元服と、帝や春宮に寵遇されていることが語られ、帝に仲忠の素性が明かされる。つまり、俊蔭一族の琴の伝承者であることが帝の知るところとなるのである。そして、藤原兼雅と清原俊蔭の娘の子・藤原仲忠として世に認知され、人生を歩み始める。

仲忠はその誕生時から理想的人物として描き出されてきた。し

かし、都に来てから「たぐひなし」と賛美される姿は、北山のうつほで光を放っていた時とは趣を異にしている。都の貴族の子弟として歩み始めた場面で用いられる用例②の「たぐひなし」は、貴族の俗世間における仲忠の美質を表現しているのである。用例②を出発点として、仲忠の俗世の美質を形容する「たぐひなし」は、その後も繰り返し用いられ続ける。

その後、十八歳で侍従になった仲忠は、五節の夜に帝の御前で琴を弾く。

③ 御前より賜はせたるせた風の琴を、胡笳の声に調べて弾くに、面白くめでたきこと、さらにたぐひなし。聞き給ふ人々、涙こぼれて、あはれがり愛で給ふ。  
(俊蔭 五六)

帝に演奏を促され、恐縮して一度断るも、父にも促され、少し弾く。その「胡笳」の音色を聞いた人々はみな涙を落とした。注意したいのは、この前の五節の舞において、兼雅が奉った五節舞姫が「かたち・用意、はかなくうち振る舞へるも、人は殊にて、上、御心とどめて御覽ず」(俊蔭 五五)と語られることである。そのあとに続く用例③の場面における仲忠は、俊蔭一族の琴の伝承者であると同時に、兼雅に付随するものとしても位置づけられている。藤原兼雅の息子、藤原仲忠として、そして秘琴の伝承者として、帝に琴の音を聞かせるのである。そしてその音色が「たぐひなし」とされるのである。

その後、帝が俊蔭の娘の参内と弾琴を望む様子が語られ、次のようにまとめられる。

④ かくて、仲忠の侍従、何ごとにもすぐれ、ただ今、世にたぐひなく抜け出でたる人なれば、よろづの上達部・親王た

ちも、「婿にせむ。婿にせむ」と、思しあまるは、御気色取り給へど、さらに承け引かず、殿にのみあり。

(俊蔭 五六)

仲忠の琴が、公の場で秘伝として賞賛されたあと、あらためて理想的な人物としての仲忠の様子が確認される。しかしその理想性は、奇瑞を生じさせたりする人間離れた生活や、聖なる空間における弾琴ではなく、上達部や親王から婿にと望まれることによつて描き出される。その際に用いられているのが「たぐひなし」なのである。

用例②では「かたち」、用例③では琴の音が賛美の対象となっているのに対し、用例④では「たぐひなく抜け出でたる人」とされ、人物全体が賛美の対象となつていくことにも着目される。貴族としての第一歩を語る際に用いられ始めた仲忠に対する「たぐひなし」は、帝の御前で、琴の披露を経て、「たぐひなく抜け出でたる人」とされたのであった。

次の二例では、女一の宮の婿としての仲忠が「たぐひなし」とされている。

⑧「仁寿殿の女御の、思ふやうにめでたき人なり。宮仕へは、同じき帝と聞こゆれど、上に、限りなく時めかされ奉りたり。

娘は、かく世にたぐひなき人に、二つなく思はせたり。…」

(蔵開・上 五二六)

⑩「…来し方行く末も、またたぐひものし給ふべき人かは。物思し知らずもありけるかな。」

(蔵開・中 五五五)

用例⑧は、女御、更衣たちが、仲忠について噂をしている場面である。その中で、仁寿殿の女御のすばらしさを語り、娘の女一

の宮は比類なく素晴らしい仲忠に愛されていると言う際、「たぐひなし」が用いられている。用例⑩は、帝が仁寿殿を早く宮中に戻らせるよう仲忠に言ったことなどを、女御、正頼、仲忠で話す場面である。帰るのを送る仁寿殿に、正頼が「あなたは仲忠という素晴らしい人を婿に迎えたのだから、それだけでも後の位なものほどのものか」と言い、婿としての仲忠を「たぐひなし」と賛美する。

この二例に共通しているのは、ほかの作中人物たちの会話の中で、「人」という表現によつて人物全体を賛美されて、最高の人物として位置付けられている点である。そして用例⑧も⑩も、女一の宮の婿、すなわち、源正頼家の婿として賛美され、仲忠に妻として愛されることや、仲忠を婿に持つことが至上の幸福の証として語られている。

ここでもやはり、仲忠は都の貴族の一人として、宮廷社会という現実の世界に据えられた上で、あくまでその現実世界における頂点として位置付けられている。そうした仲忠のあり方を語るときに用いられるのが「たぐひなし」なのである。

そして、仲忠に対する「たぐひなし」の特徴として、特定の要素ではなく人物全体が賛美の対象となる点が挙げられる。「たぐひなし」という表現を複数回用いられているあて宮も俊蔭の娘も、男性から姿を見られ、その容姿だけが「たぐひなし」とされている。それに対して、要素を限定せずに人物全体を賛美されるのは、仲忠だけなのである。

## 六 「世にまたたくひなくものし給ひける人」

最後に、用例⑭について検討する。弾琴披露が終わり、禄を賜る場面である。

⑭左大弁、立ち返り参りて啓すれば、宣旨のいとく下りたるを、院の上たちも喜ばせ給ひて、上達部の中に告げさせ給ひて、宣旨高く読むを、尚侍聞き給ふに、治部卿の所に、涙落ち、悲しくて、身の尚侍になり給ひしよりもうれしくおぼえ給ふこと限りなし。右大将、二つのことの喜びのよし奏せさせて、舞踏し給ふ。嵯峨の院は、たちまちに、思すやうにはなやかなることの、大将のなきを、なほ飽かず思さる。御方々より、童部の舞ひつるに被けさせ給ふ物、色々、濃く薄く、さまざまなる織物、搔練のめでたく打ちたる、朝ぼらけに、いといとをかし。御方々、「世にまたたくひなくものし給ひける人かな」とのたまはぬ、なし。いぬ宮の弾き給ひつる様を、親宮の、かの五十日の餅参りしほどの、「昨日今日」と思すに、いとあはれなり。藤壺、「これを、『わが御子』と思はましかば」と思す。  
(楼の上・下 九三九)

いぬ宮への秘曲伝授、京極邸での弾琴披露を終え、物語は大団円を迎えようとする。嵯峨の院は、俊蔭への中納言追贈、京極の地の徐爵、俊蔭の娘に対する従二位の加階を奏上し、それを認める宣旨がいち早く下ったことを喜ぶ。読み上げられた宣旨に、俊蔭の娘（尚侍）は涙し、仲忠（右大将）は拝舞する。さがのの孫たち（童部）が禄を賜り、犬宮の成長に感激する女一の宮、

いぬ宮が自分の娘であったならと思うあて宮が描かれる。俊蔭の生前の不名誉が晴らされ、俊蔭一族の琴の絶対性があらためて確認される場所である。

当該場面においては、誰が「たぐひなくものし給ひける人」と賛美されているのか、文脈だけでは判断が難しい。この箇所について言及している諸注釈書の解釈を確認すると、「たぐひなくものし給ひける人かな」について、『大系』は俊蔭一族、『全書』はさがのの孫たち、『新全集』が仲忠を指しているかとする。このように、当該箇所については、諸注釈書の解釈が一致しないが、前節までに見てきた「たぐひなし」の特徴をふまえて考えてみたい。

秘曲の伝授を経て、琴の披露がもたらしたものは、徐爵や加階、仲忠の用意した童部の賜る禄という極めて現実的なものによって描写されている。ここで思い出したのは、「たぐひなし」が俗世における至上の賛美として機能しているということである。

そして、当該場面における「たぐひなし」は、対象の人物全体を賛美している。前節に見た通り、人物全体を「たぐひなし」とされるのは仲忠だけであった。以上のことから、用例⑭の「世にまたたくひなくものし給ひける人かな」を、仲忠に向けられたものと解したい。

あらためて用例⑭として引用した場面を見てみると、まず、宣旨が下ったことに対して涙を流す俊蔭の娘が描かれ、そこから仲忠に話題が転じ、仲忠の用意したさがのの孫たちが禄を賜り、最後に犬宮が焦点化される。犬宮への評価は、母である女一の宮、そして国母であるあて宮による賛美によって語られる。俊蔭一族

の栄華の極みが描かれるこの場面において、昇進を辞退した仲忠自身に対する、加階に代わるものが、用意した童部が賜る禄と、「世にまたたぐひなくものし給ふ人かな」という、俗世の最上を示す賛美ではなからうか。

### おわりに

『うつほ物語』における「たぐひなし」という賛美表現をたどると、都の貴族社会という現実的な世界で用いられていることがわかる。

あて宮に対する「たぐひなし」は、あて宮を思慕する実忠を描きながらも、求婚していた当時の、あて宮に対する狂おしい恋情を語る際には用いられない。むしろ、あて宮を「たぐひなし」とする実忠の思いは、娘の入内を検討したり、東宮の後見として位置付けられたりする源氏の一員として、一族の直面する現実に対処しながら貴族社会を生きていく際に語られる。

「天女」と評される人間離れた美貌を持つ俊蔭の娘は、兼雅や帝によって「たぐひなし」とされる。しかしその賛美は、「天女」としてではなく、あくまでも貴族社会の一人の女性として男性の目に捉えられることによって付与されている。兼雅や帝の、俊蔭の娘を「たぐひなし」とする思いは、結果的に俊蔭の娘とその息子である仲忠の貴族社会における地位を磐石なものにしていく。

そして、仲忠に用いられる「たぐひなし」は、宮廷社会を生きる一人の人間としての美質や理想性を語る賛美である。その理想

性は、うつほという異界に住む光輝く異形のものではなく、あくまで貴族社会の現実的な俗世を生きる一人の人間の理想性なのである。

『源氏物語』は、物怪や夢のお告げなどの非現実的な現象を描くことも多少あるが、基本的には現実的な貴族社会を描く物語である。それに対して『うつほ物語』は、俊蔭巻をはじめとした秘琴伝授の伝奇的な世界と、求婚や立坊争いや栄達などの貴族社会の現実的な世界との、二つの世界を描く物語である。俊蔭の娘と仲忠は、秘琴の伝承者でもあり、貴族社会を生きる人間でもあるので、言わば伝奇的な世界と現実的な世界という二つの世界を生きる人物である。その二人が都の俗世における美質を發揮する時に「たぐひなし」という賛美が用いられるのである。

『うつほ物語』が描く、異界における伝奇的な世界と俗世における現実的な世界という二つの世界のうち、貴族社会という俗世において、きわめて現実的な視点から対象を至上のものとして絶賛するのが『うつほ物語』の「たぐひなし」なのである。

### 注

(1) 中野幸彦・岡見正雄・板倉篤義編『角川古語大辞典』（角川書店、一九九二年）。

(2) 「ありがたし」「世になし」「似ず」などが挙げられる。

(3) 『源氏物語』においては、とくに、光源氏が用いる「たぐひなし」に「紫のゆかり」の問題に関わる独自性が認められる。

高橋早苗「源氏物語」の「たぐひなし」——紫のゆかりの女君たちをめぐって——（『中古文学』第九十号、二〇一二年十一月）は、光源氏の用いる「たぐひなし」を、藤壺に対する恋慕の情

の象徴として捉え、それが紫の上に対して使われるようになることで、紫の上が光源氏にとってかけがえない絶対的な存在になりえたことを跡づけるのだとした。また、拙稿「光源氏にとっての「たぐひなし」―紫の上へのまなざし―」（『立教大学日本文学』第一一四号、二〇一五年七月）では、光源氏の用いる「たぐひなし」を、藤壺に対する思慕を紫の上に投影する光源氏を描くものとして位置付け、「源氏物語」における「たぐひなし」―光源氏にとっての「たぐひなし」の独自性―（『立教大学日本文学論叢』十五号、二〇一五年九月）においては、二人の人物に「たぐひなし」を用いること、どちらか一方をも一方の対象に投影する用い方に独自性があることを指摘した。

- (4) 湯原美陽子「王朝物語文学に見られる容姿美の美的表現語彙」（『王朝物語文学における容姿美の研究』有精堂、一九八八年）。
- (5) 「たぐひなし」に類する表現として、存在を否定する語が「たぐひ」についているもの（「たぐひものしたまふべき人かは」「たぐひあるべき人にもあらず」など）も認めた。
- (6) 「うつつほ物語」の引用は、室城秀之「うつつほ物語 全」（おうふう、一九九五年）により、一部表記をあらためた。
- (7) 湯原美陽子「王朝物語に於ける人間性の確立と容姿美―『宇津保物語』に見られる容姿美と才―」（注4に掲出の『王朝物語文学における容姿美の研究』）。
- (8) 「うつつほ物語」において「こともなし」は賛美表現として用いられることが多い。なお、「うつつほ物語」における「こともなし」については別稿を用意している。
- (9) 須見明代「『宇津保物語』における俊蔭女」（『東京女子大学日本文学』第三十九号、一九七三年三月）。須見は、あて宮と

俊蔭女の二人に（かぐや姫）が重ねられているとする。そのほか、あて宮にかぐや姫を重ねる論考には、笹淵友一「宇津保物語の解釈上の問題」（『講座・解釈と文法』明治書院、一九六〇年）、石川徹「うつつほ物語の人間像」（『宇津保物語論集』古典文庫、一九七三年）、関根賢司「かぐや姫とその裔」（『物語文学論―源氏物語前後―』桜楓社、一九八〇年。初出一九七四年）、室城秀之「うつつほ物語」におけるあて宮（『うつつほ物語の表現と論理』若草書房、一九九六年。初出一九九三年）などがある。

- (10) 注9に掲出の笹淵論文。
- (11) 高橋亨「竹取物語 かぐや姫論―変化のもの」（『別冊国文学』三四号、一九八八年五月）。三谷栄一「物語の主人公」（『物語文学史論』新訂版、有精堂、一九六五年）。
- (12) 猪川優子「うつつほ物語 俊蔭女の（尚待物語）―仲忠への女の宮降嫁からいぬ宮入内へ―」（『国語と国文学』二〇〇三年七月）。
- (13) 注7に掲出の湯原論文。
- (14) 猪川優子「うつつほ物語」の「秘琴」と（あて宮）―「繋がり」の形成をめぐって―」（『古代中世国文学』九号、一九九七年三月）、野口元大「霊異と栄誉―『楼の上』の主題―」（『平安文学論究会編』講座 平安文学論究』第十二輯、風間書房、一九九七年）。
- (15) 使用した注釈書は次の通りである。河野多麻枝注『宇津保物語』（『日本古典文学大系』（『大系』と略記）、宮田和一郎校注『宇津保物語』（『日本古典全書』（『全書』と略記）、中野幸一校注『うつつほ物語』（『新編日本古典文学全集』（『新全集』と略記）。
- (16) 「世にまたたぐひなくものし給ひける人かな」とのたまは

ぬ、なし」に関しては、『大系』は「この世に比類のない事をなされた人々（俊蔭一族）だな」と評判しない者はいない。」「『全書』が「四人の童子をほめる詞。」「『新全集』は「仲忠の賞賛か。」と言及している。なお、当該箇所直前の「御方々」については、『新全集』が「女君、女宮たちをいう。」としているのみである。

（いずみや さつき 本学大学院博士課程後期課程）